

桜井市吉備で受け継ぐ縄(なわ)屋の3代目で「わらしべ工房なわや高橋」代表の高橋伸壽さん(69)は、主に神社のしめ縄や藁(わら)製品を製造販売している。昨年度は、地元産品をPRする「大和さくらいブランド」として、桜井市から認定。商品名は長谷寺ゆかりの地と伝わる昔話「わらしべ長者」にちなんで「わらしべしめ縄 宝船」(1万5000円)で、七福人の乗った船を地元の稲藁で制作、県内でも数少なくなった藁縄職人の技術がさえる。米の収穫が終わり、稲藁が手に入るこの時期。正月を控え、神社へのしめ縄づくりなど多忙な日々を迎えている。

Made  
in  
奈良

桜井市 わらしべ工房なわや高橋

## ふるさと納税返礼品や 新築・開店祝いに重宝

「なわや高橋代表  
高橋伸壽さん



昭和25(1950)年、祖父の高橋藤作氏が「高橋製縄所」として創業。材木をくくる縄を作ることを生業としてきた。材木屋に入れる藁縄製造、卸販売(小売りも含む)が、時代とともに材料が藁から石油製品の荷造り資材、包装資材を取り扱うように。昭和50年代に屋号を「なわや高橋」と変更。平成16(2004)年6月、2代目の父親から代々の思いを受け継ぎ、事業承継した。

高橋代表は「僕がものづくりを始めたのは48歳から。榛原の師匠に草履、草鞋、俵のいろんな作り方を習い、新聞に藁細工をしている人が載っていたら、そこを訪ねて行って教えてもらった。2人目の師匠は御所の方。そこに聞きに行ったり、御杖村にも行ったりして全部メモを取り学びました。そんなつながりが広がっていきました」と話す。

人と人とのつながりを大切に「地域密着型」を目指してきた高橋代表。現在、取扱商品の売り上げに対する割合は石油製品の荷造り資材が4分の1、紙製荷造り資材が2割、藁製品が7割。販売業態別に売り上げを分けると、事業所向け御が6割で一般向け小売りが4割だという。

「うちは基本的には荷造り資材を作っていたので材木屋さんがほとんどの得意先ですが、紐(ひも)、縄、ロープもね。藁縄が石油製品のPP紐などに変わってきたという感じです。それで材木

も景気が良かったし、生計はずっと立てていたのですが、やっぱり材木の衰退とともに、うちの業績も悪くなってきました」と話す。

しめ縄は、新しい稲藁を用い、歳神(としがみ)、農耕の神を迎えるための標(しるし)として、また内と外とを区画して浄と不浄のけじめをつけるもの。正月のしめ縄や門松などの飾り物は、凶事から人間を守護してくれるようにと願う、祈りの造形物。

市内で神社のしめ縄の注文を受けだしてから、県内はもとより大阪、京都など各地へ広がっていった。名前を聞けば、誰でも分かるような神社から、小さい氏神さんに至るまで注文が舞い込むように。「なかなか、しめ縄も同じ太さにするというのは難しく」と高橋代表。

桜井市のふるさと納税の返礼品にもなり、新築祝いや開店祝いなどに重宝がらわれている宝船づくりについては、「3本寄せたしめ縄を4本作ってそれを土台にし



④ 大和さくらいブランドの『わらしべしめ縄 宝船』  
⑤ 藁縄商品の数々



## 『わらしべしめ縄 宝船』が「大和さくらいブランド」に 後継者づくりを「しめ縄体験教室」にかける

ています。師匠のところで買った七福神と鶴と水引でできたものを付けて派手さを出すようにし、うちは人形を乗せたりします。右向きの帆があるのが入船。左にあるのが出船になります。うちは入船にこだわっています」と話す。

加えて高橋代表は「昔は縄の問屋さんがたくさんありました。大阪の得意先で、新聞社などがたくさん使っていましたね。でも残ったのがうち。希少価値といいますが、祭りなどには藁縄が要ったりしますから。藁縄が要るのは神社関係、祭り関係、茅原のとんど(御所市)など。生産者も少ない」と語る。

今一番の気がかりは後継者。高橋代表は「それが問題ですね。なかなか、これで食べていくまでということが。今の小売店の問題点でもあるし、しめ縄とか藁縄の技術を残すにも、後継者がいないですね。昔は氏神さんで、村のものが出来たりしましたが、それが出来ないで。それで聞いて、うちに頼みに来ると

いうのが現状です」と少し寂しそうに話す。

その上で「先にしめ縄を作っておられるグループづくりをやっていると思ってます。このままいって、日本の稲作文化が途絶えてしま

うのではないかとさえ思うことがあります。今は学校では神話を教えない。高天原のアマテラスオオミカミから孫のニギノミコトに稲作を渡して、『これで、日本の国民を飢えさせるな』というのが天孫降臨ですよ。で、降りたところというのが、稲穂が千ほど山になったという高千穂(今の宮崎県です)よね」と話に熱が入る。

アマテラスオオミカミが岩屋に閉じこもった時、もとに戻らないようにとアメノタヂカラオノミコトがぐっと開けて、シリクメナワ(尻久米縄)というのを作った。戻らないようにしたのが、しめ縄の起源と言われている。12月の子どもさんとお父さんとのしめ縄体験教室行事で、しめ縄の起源の説明をするのです。コロナの前には、香久山地区も含め何年かしめ縄教室をやっていましたと真剣そのもの。

初心者には、家庭用に二人で作るのは難しいため、「家族二人なら作りやすいのでは」と、しめ縄体験教室にも毎年工夫を凝らして簡単にできるようにしている。「今は自分の作ったものを正月に使いたいというので、プラスチックのウラジロと私どもで作った橙(だいだい)をそのまま使ってもらっています」という力の入れよう。

体験教室で教えているグループの中から、しめ縄づくりに興味を持つ青年に巡り合えるかどうか。将来、高橋さんが後継者に指名するようになるとも限ら

ない。

「ネックは、しめ縄って奉納が基本なのです。だから値段的に厳しい。食べていけるほどの収入はないという。桜井で手づくりのものばかりでグループをつくったりしていますが、昔は手に職を持ったら食いはぐれがないと言われました。今は食いはぐれしています」とも。

それでも、高橋代表は「コメ作りには、結構大阪の方などが来ておられます。興味のあるような方がいたら仲間づくりしていくとか。うちは飛鳥ニューツーリズムという、学生さんを受け入れている民泊があります。そこでしめ縄作りや、竹トンボ作り、ロープワークなどをしたり。観光でも、マスコミで紹介されるレストランです。採算が取れていけるように、うちらも協力しながら何とかやっていきたいです」と思いをつなぐ。



○創業=昭和25(1950)年  
○代表=高橋伸壽  
○事業内容=荷造り材料の卸小売り  
今は神社用のしめ縄など藁縄工芸品の製作・販売。しめ縄の体験教室、かご作り体験も行っている。  
○住所=桜井市吉備174-1  
○電話番号=0744(43)8482  
○ファクス=0744(43)8483



<https://r.goope.jp/nawaya>